

—編集後記—

土壌の物理性 139 号をお届けします。いかがだったでしょうか？次回、140 号からは寒冷地特集がスタートします。楽しみにしててください。

さて私ですが、土壌物理学会の編集委員を担当するのは実は 2 度目で、1 度目の任期は 2011～2012 年度でした。編集委員の顔ぶれを見ますと、1 度目の時も 2 度目の時も大学や公設農試等、研究機関の方々が中心で、私のような民間企業に所属している者が編集委員を担当するのはまれだと思います。構成メンバーが研究機関中心の学会なので、「なぜ民間企業の会社員が土壌物理学会に？」と疑問を持つ方もいらっしゃると思います。そこで簡単に私の会社の紹介をしたいと思います。

私の所属する（株）ズコーシャは、帯広に本社を構える建設コンサルタント会社です。北海道十勝という土地柄、農業に関連する仕事が多く、畑地や草地の測量や設計を行う部門に加え、土壌・作物調査等の農業調査部門を持っています。私は調査部門に所属しており、暗渠排水や土層改良等、土壌の物理性に関係する調査に取り組むことが多いです。このような経緯から土壌物理学会に

入会し、最新の知見を収集するようにしています。

そのような中、昨年度、今年度と多湿黒ボク土畑で融雪時の暗渠排水の流量観測を行う機会がありました。農耕期間が積雪で限られている北海道ですから、融雪時の迅速な排水は大変重要です。しかし、昨年度は融雪時に全く暗渠から水が流出しませんでした。その後普通に営農が開始され、そもそもこの圃場に暗渠が必要なのかという疑問を持ちました。しかし、今年度は融雪直後から暗渠排水からどんどん水が流出し、流出が終わったのは観測を始めてから約 4 週間後でした。確かに今年度は 3 月上旬に大雪が降ったのですが、そのことが、この極端な融雪時の暗渠排水の年次差を説明できるほどの要因に思えません。改めて、土壌の物理性の奥深さを感じているところです。

後 1 年弱、編集委員に従事する期間が残されています。期間中に、この奥深き土壌の物理性を誌面上で少しでも紐解いていければ良いなと思っています。

丹羽勝久（編集委員）

土壌物理学会

事務局構成

会 長	石黒 宗秀	(北海道大学)
副 会 長	竹内 晴信	(北海道立総合研究機構)
事務局長	柏木 淳一	(北海道大学)
編集幹事	塚本 康貴	(北海道立総合研究機構)
会計幹事	倉持 寛太	(北海道大学)
会計監査	弘行 充宏	(北海道立総合研究機構)
	横濱 卓治	(土木研究所寒地土木研究所)
編集委員会	澤本 卓治	(酪農学園大学)
委 員 長	飯山 一平	(宇都宮大学)
委 員	岩田 幸良	(農業・食品産業技術総合研究機構)
	北川 巖	(農業・食品産業技術総合研究機構)
	小林 幹佳	(筑波大学)
	三枝 俊哉	(酪農学園大学)
	清水 真理子	(土木研究所寒地土木研究所)
	鈴木 伸治	(東京農業大学)
	中川 進平	(秋田県農業試験場)
	中野 恵子	(農業・食品産業技術総合研究機構)
	中村 和正	(土木研究所寒地土木研究所)
	丹羽 勝久	((株)ズコーシャ)
	笛木 伸彦	(北海道立総合研究機構)
	渡辺 晋生	(三重大学)